

# アメリカ合衆国カンザス州南西部の 甜菜糖産業とロシア系ドイツ人

矢ヶ崎 典 隆

- I. はじめに
- II. 甜菜糖産業の成立
  - (1) 甜菜の導入
  - (2) 製糖工場の開設
  - (3) 土地所有
  - (4) 産業基盤の整備
- III. ロシア系ドイツ人の流入
  - (1) ドイツ人からロシア系ドイツ人へ
  - (2) 連邦センサス調査票による住民属性の分析
  - (3) 2家族の移住史
- IV. 甜菜栽培と製糖
  - (1) 直営農場
  - (2) 小作農方式
  - (3) 製糖
  - (4) 甜菜糖産業の崩壊
- V. おわりに

## I. はじめに

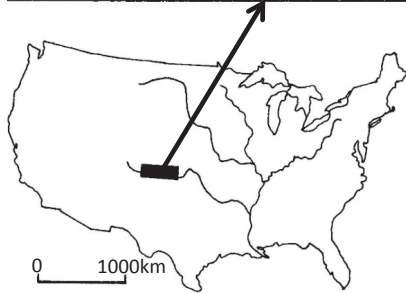
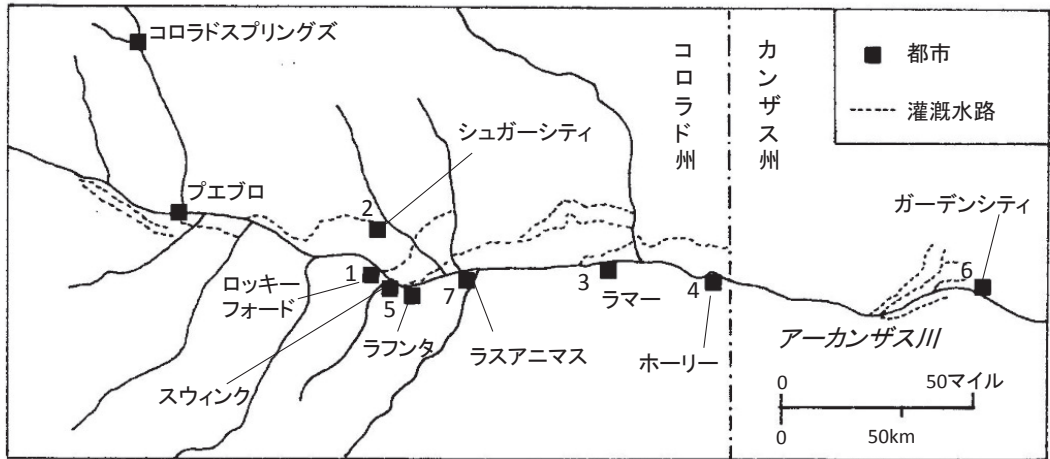
19世紀後半から20世紀初めにかけてのアメリカ西部の開拓と発展は、地理学にとって重要な研究課題であり、研究のキーワードとなるのは、政策、土地、資本、鉄道、技術、灌漑、農業、移民、そして砂糖である。連邦政府の開発政策、公有地の分割と払い下げ、民間資本の流入、鉄道会社の鉄道敷設と不動産事業、技術の移転と開発、灌漑事業、農業経営、移民労働力、甜菜を原料とする製糖業に

着目することによって、アメリカ西部の地域変化をダイナミックに描くことができる。甜菜と製糖業についてはすでに学術的な関心が払われてきたが<sup>1)</sup>、甜菜糖産業をアメリカ西部の地域変化の文脈で論ずることは課題として残されたままである。筆者は、こうした課題を念頭に置いて、アメリカ合衆国における甜菜糖産業の展開について、そしてアーカンザス川流域における灌漑化、甜菜栽培、製糖業について、すでに別稿で概要を明らかにした<sup>2)</sup>。

ロッキー山脈を水源として東に流れるアーカンザス川は19世紀末には「アメリカのナイル」とも称され、豊かな水量を利用した灌漑事業は半乾燥地域における農業発展の原動力となった<sup>3)</sup>。コロラド州南東部からカンザス州南西部にかけてのアーカンザス川沿いはアメリカ西部における甜菜糖生産地域の一つに発展し、ここには7つの製糖工場が建設された(図1)。もっとも下流に位置したのが、カンザス州フィニー郡のガーデンシティに1906年に建設されユナイテッドステーツシュガーアンドランドカンパニーThe United States Sugar and Land Companyであった。この会社は複数回の社名変更(The Garden City Sugar and Land CompanyからGarden City Companyへ、そしてThe Garden City Companyへ)を経験したが、20世紀前半におけるカンザス州南西部の経済発展に主導的役割を果たした<sup>4)</sup>。

---

キーワード：砂糖産業、甜菜、グレートプレーンズ、ロシア系ドイツ人、移民



- 製糖工場（操業年）
- 1: American Beet Sugar Company (1900-1978)
  - 2: National Sugar Manufacturing Company (1900-1967)
  - 3: American Beet Sugar Company (1905-1913)
  - 4: Holly Sugar Company (1905-1913)
  - 5: Holly Sugar Company (1906-1958)
  - 6: United States Sugar and Land Company (1906-1955)
  - 7: American Beet Sugar Company (1907-1921)

図1 アーカンザス川流域の製糖工場

矢ヶ崎典隆「アメリカ合衆国アーカンザス川流域の甜菜糖産業」歴史地理学42-4, 2000, 1-22頁により作成。

カンザス州南西部の甜菜糖産業を論じるためには、この製糖会社の事業を解明する必要がある。

半乾燥のアメリカ西部にける甜菜糖産業を論じる際に、労働力は決定的な意味を有する。製糖工場が存立するためには、甜菜糖にしてもサトウキビ糖にしても、原料の安定した供給が基盤となる<sup>5)</sup>。甜菜栽培は、春の播種後、間引き、除草、そして収穫などの農作業に多量の労働力を必要とした。また、アメリカ人農民は、腰をかがめた農作業が重労働であるため、一般に甜菜栽培には消極的であった。その結果、アメリカ西部の甜菜栽培は移民労働力へ依存することによって維持され、メキシコ人、日本人、ロシア出身のドイツ人（ロシア系ドイツ人）などが重要な役割

を演じたことが指摘された<sup>6)</sup>。

なかでもロシア系ドイツ人は、19世紀末からグレートプレーンズに流入してエスニック社会を形成し、草原地域の経済発展に貢献した<sup>7)</sup>。ヴォルガ川流域の出身者はヴォルガジャーマン（Volga German）と呼ばれ、アーカンザス川流域では甜菜栽培に大きな貢献をはたした。アメリカ合衆国への移民の流入と植民については多くの地理学的研究の蓄積があるが<sup>8)</sup>、移民を地域の枠組みに位置づけて解釈するというエスニック地誌の意義が指摘されている<sup>9)</sup>。1970年代以降、エスニック集団としてのロシア系ドイツ人とその子孫は、ロシア出身ドイツ人アメリカ歴史協会（American Historical Society of Germans from Russia）を組織し、固有の文化とアイデン

ティティの維持に努めている<sup>10)</sup>。

本論文は、カンザス州南西部のフィニー郡ガーデンシティを中心とした地域(図2)を研究対象として、20世紀初頭から1950年代までの甜菜を原料とした製糖業の展開を、製糖工場とロシア系ドイツ人に着目することによって説明することを目的とする。カンザス州南西部の中心都市ガーデンシティにはフィニー郡歴史協会Finney County Historical Societyがあり、その資料館はこの地域に関する文書資料の宝庫である。フィニー郡とカーニー郡の郡役所(Register of Deeds)では不動産登記関係記録を閲覧した。ガーデンシティカンパニーは1955年に製糖事業を止めた後も農産企業として経営を続けており、製糖

に関する資料収集に協力を得た。ロシア系ドイツ人社会と甜菜栽培について、二人の高齢のヴォルガジャーマンから聞き取り調査をすることができた。以上の資料に基づいて、20世紀前半におけるカンザス州南西部の甜菜糖産業とロシア系ドイツ人について検討し、地域変化を明らかにする。

## II. 甜菜糖産業の成立

### (1) 甜菜の導入

甜菜を原料とする製糖業は19世紀にヨーロッパで大きく発展し、1890年までにはヨーロッパは砂糖の輸出地域となった。19世紀前半にはアメリカでも甜菜糖に対する関心が徐々に高まり、ヨーロッパから甜菜、製糖技

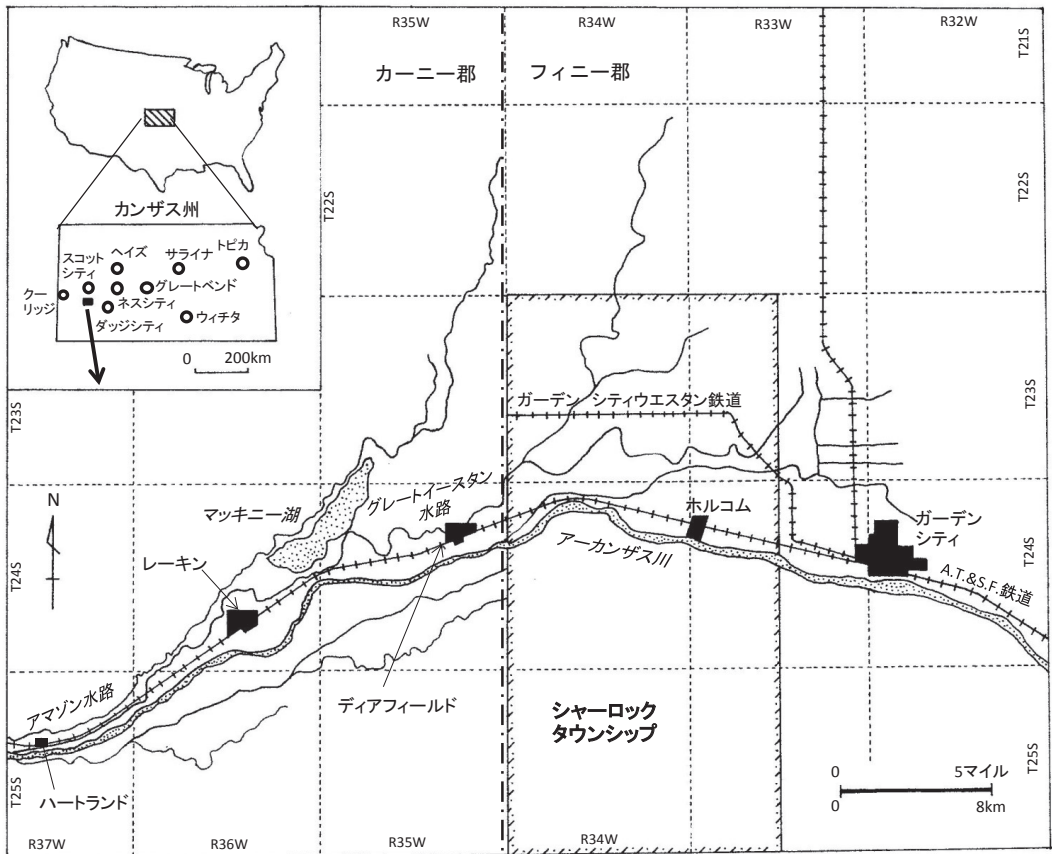


図2 カンザス州南西部の研究対象地域

術、そして人材がアメリカに導入された。しかし、ヨーロッパとは異なる自然環境と社会環境のもとで甜菜栽培と製糖業が発展するためには、さまざまな調整が必要となった。甜菜は気候条件の点では南部を除く広い地域で栽培可能であったが、トウモロコシの栽培カレンダーと競合するため、中西部の混合農業地域では採用されなかった。一方、西部の半乾燥地域では、カンザス州やコロラド州のように、19世紀末以降の灌漑事業の進展にもなって、甜菜は重要な灌漑作物となった<sup>11)</sup>。

カンザス州では、1887年3月5日に砂糖生産奨励法 (An act to encourage the manufacturing of sugar) が施行され、州内で生産された砂糖に補助金を出して砂糖生産を奨励する事業が始まった。初期の原料は砂糖もろこしで、1890年には137.2ポンド (約622トン) の砂糖が生産された。甜菜糖はまだ試作段階で、ある製糖会社がいくつかの圃場で試験的に栽培して製糖を行った結果、甜菜の処理施設を完備すればカンザス州では甜菜糖が有望であることが実証された。カンザス州農務省の年次報告書には、砂糖産業の概要に加えて、甜菜糖への期待が論じられた<sup>12)</sup>。

アーカンザス川流域には、カンザス州南西部の上流域に位置するコロラド州のロッキーフォードとシュガーシティに1900年に製糖工場が建設された。シュガーシティのナショナルビートシュガーカンパニー National Beet Sugar Company は自社の農場で甜菜を自給する直営農場方式を採用した。一方、ロッキーフォードのアメリカンビートシュガーカンパニー American Beet Sugar Company は地元農民に甜菜栽培を委託する契約栽培方式をとった<sup>13)</sup>。一般的な農家が家族労働力のみで栽培できる甜菜は最大20エーカー程度であり<sup>14)</sup>、製糖工場の稼働に必要な甜菜供給面積を確保するために広域な生産者の協力が必要であった。1901年春の地元新聞には、コロラド州境に近いカンザス州シラキユースを含めて契約

面積は15,000エーカー、計画処理量15万トン規模での操業が予定されていると報じられた<sup>15)</sup>。カンザス州南西部では、ロッキーフォードの製糖工場との契約によって甜菜栽培が始まり、秋に収穫された甜菜は、アーカンザス川に沿って走るアッチソントピカアンドサンタフェ (A.T.&S.F.) 鉄道を使って製糖工場まで運搬された。この鉄道はアーカンザス川左岸を旧サンタフェトレイルに沿って敷設されたもので、ガーデンシティにはすでに1872年秋に到達していた<sup>16)</sup>。

以上のようなカンザス州南西部における栽培実績から甜菜が有望であると判断された結果、1901年にカンザス州政府は甜菜栽培奨励法 (An act to encourage the cultivation and production of sugar-beet and making an appropriation therefor) を施行した。州内で栽培された甜菜のうち糖度が12%以上で製糖に実際に利用されたものを対象として、1トン当たり1ドルの奨励金を生産者に払うことが規定された。1901年にこの対象となったのは77人の生産者 (生産量1,747.36トン、栽培面積337エーカー) で、甜菜はロッキーフォードの製糖工場に出荷された。糖度には13.3%から22.8%の幅があり、平均糖度は17.8%であった<sup>17)</sup>。

2年目の1902年には、カーニー郡とフィニー郡の85人がアメリカンビートシュガーカンパニーと栽培契約を結んだが、10人が脱落した。75人の生産者が439エーカーの甜菜を作付けし、4,250.61トンを出荷した。フィニー郡ではガーデンシティの生産者が16人、その西のカーニー郡ディアフィールドの生産者が18人を数えたし、さらに西のレーキンの生産者は41人であった。3年目の1903年は、86人が甜菜を栽培したが、遅霜などの天候不順や病虫害で不作に終わった。生産者は失望したものの、通常の天候であれば甜菜が有望であることを認識した。州政府から甜菜生産者に支払われた補助金は、1901年には1,747.36

ドル、1902年には4,250.70、1903年には695.60ドルであった<sup>18)</sup>。なお、アメリカンビートシュガーカンパニーは甜菜種子を1ポンド当たり10セントで供給したし、最初の収穫後の支払いを前提として、甜菜耕作のための農機具を提供した<sup>19)</sup>。

以上のような製糖会社による甜菜契約栽培の奨励とカンザス州政府の甜菜栽培補助事業によって、カンザス州南西部が甜菜の栽培に適していることが認識された。この地域の甜菜の生産量は増加し、1905年には100人以上の農業者が8,695トンの甜菜を生産した。初期の甜菜栽培の中心はディアフィールドとレーキンの地域であり、とくにレーキンの住民はこの作物が定着すれば製糖工場がレーキンかその近くに建設されるものと期待したという<sup>20)</sup>。

## (2) 製糖工場の開設

カンザス州南西部では、甜菜栽培の拡大にともなって、製糖工場の誘致活動が活発化した。製糖工場を誘致するためには、鉄道や灌漑水路の整備に加えて、地元で十分な甜菜栽培面積を確保すること、そして製糖事業のための外部資本を引き付けることが必要であった。こうした条件を整えることに尽力するプロモーターも不可欠な存在であった。

ガーデンシティ地域にはすでに19世紀末に5つの灌漑会社が設立され、グレートイースタン水路、ファーマーズ水路、アマゾン水路などの灌漑水路の建設が進んだ<sup>21)</sup>。コロラド州ロッキーフォードの実業家で灌漑事業のプロモーターとして知られたジョージ・スウィンクは、製糖事業家として知られたオックスナード兄弟に働きかけてロッキーフォードへのアメリカンビートシュガーカンパニーの誘致に成功したが、再びオックスナードに対してガーデンシティに製糖工場を建設するよう提案した。しかし、会社が要求した12,000エーカーの甜菜栽培面積を地元で確保するこ

とができなかった<sup>22)</sup>。

ガーデンシティの実業家たちは、スウィンクの協力を得ながら、コロラドスプリングズの資本家の関心を引き付ける誘致活動を続けた。誘致委員会が組織され、地元資本を調達して土地を購入するための準備が1902年に始まった。こうして、誘致委員会はグレートイースタン水路を買収し、フィニー郡とカーニー郡に、ディアフィールド市街地を含めて12,000エーカーあまりの土地を購入した。これらの土地はグレートイースタン水路に沿った放棄農場の未開墾地がほとんどであった<sup>23)</sup>。さらに8,000エーカーが購入され、所有面積は20,000エーカーとなった。地主と誘致委員会との間に土地譲渡契約が結ばれ、製糖会社が設立され製糖工場が完成した後に、その製糖会社に対して譲渡契約が移譲されることになった<sup>24)</sup>。こうして、製糖事業を開始するための土地、灌漑水路、水路に付随する水利権の確保が実現された。

ガーデンシティの製糖事業に関心を寄せたのは、アーカンザス川上流部にあたるコロラド州クリップルクリークの金鉱開発で富を築いた実業家や資本家など、コロラドスプリングズを中心とする人びとであった。1905年にはユナイテッドステーツシュガーアンドランドカンパニーがコロラド州法の下で設立され、同社はガーデンシティに製糖工場を建設することを決定した。当初の経営陣はほとんどがコロラドスプリングズ在住の人びとであった。製糖工場の建設のために300万ドルが投資された<sup>25)</sup>。

地元住民にとって念願の製糖工場は1906年11月15日に操業を開始した。ガーデンシティインダストリアルクラブ(Garden City Industrial Club)は、製糖工場の開業を祝う祝賀行事を開催した。アッチソントピカアンドサンタフェ鉄道も、沿線の諸都市からガーデンシティまでの往復運賃を片道運賃プラス50セントとする特別割引料金を提供して、この祝賀

事業に協賛した<sup>26)</sup>。オープニングにはエクスカーション列車が製糖工場まで走り、これには数百人の見学者が乗車した。工場長が工場施設を案内し、昼食が振る舞われた。また、ガーデンシティインダストリアルクラブの招待で200人がガーデンシティのホテルで食事をした<sup>27)</sup>。地元新聞には、「製糖工場の開業はガーデンシティにとって最も偉大な日」(Sugar Factory Opening, The Greatest Day for Garden City) という見出しで報じられた<sup>28)</sup>。

ガーデンシティの製糖工場は、初年度、3か月にわたって操業し、1907年2月18日に製糖が終了した。200~300人が12時間交替制で働き、処理された甜菜は合計66,000トンに及んだ<sup>29)</sup>。この製糖工場の処理能力は1日当

り600トンであったが、操業期間中ずっとこの処理能力の上限まで稼働した。初日には900トンが処理されたと地元新聞は報道した<sup>30)</sup>。1906年12月11日には24時間に800トンの甜菜を処理し、2,608袋の砂糖を生産した。なお、連邦政府は、1915年まで、甜菜栽培に関する研究を行うための実験室を製糖工場内に開設した<sup>31)</sup>。

### (3) 土地所有

ユナイテッドステーツシュガーアンドランドカンパニーは、その社名が示唆するように、甜菜を確保するための土地を所有する農産会社であった。図3は、フィニー郡およびカーニー郡の郡役所 (Register of Deeds) 所

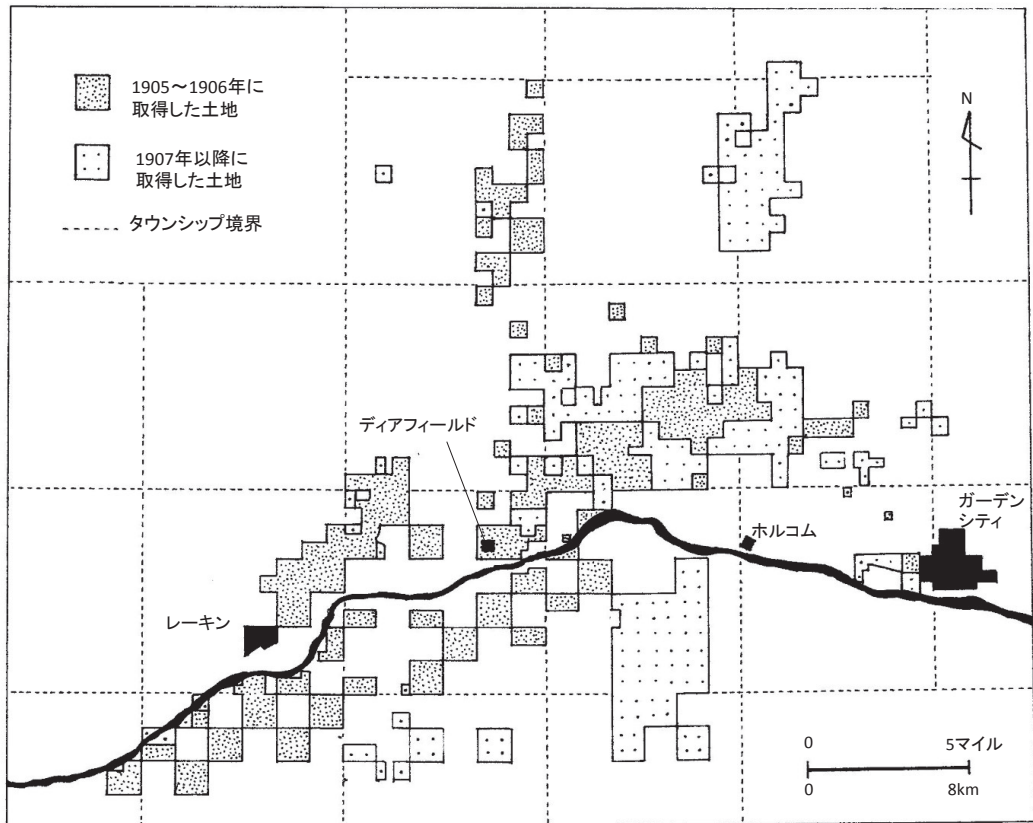


図3 ガーデンシティ製糖工場の土地所有  
カンザス州フィニー郡およびカーニー郡の郡役所の不動産登記簿により作成。

蔵の不動産登記簿を資料として、設立直後の所有地およびその後購入した土地を復元したものである。セクション(640エーカー)あるいは4分の1セクション(160エーカー)を単位として土地が取得された。20,000エーカーの土地は徐々に拡大し、最盛期には52,000エーカーに及んだ。とくにアーカンザス川の左岸では、灌漑水路とともに連続した広大な土地が所有された。

しかし、製糖工場の経営は必ずしも順調ではなかったようで、抵当権実行によって多くの投資家が手を引き、組織再編に伴ってたびたび名称が変更され、土地が処分された。1913年まではThe United States Sugar and Land Companyと呼ばれたが、1914年の再編成によって、ガーデンシティシュガーアンドランドカンパニーThe Garden City Sugar and Land Companyに社名変更した。1920年には、抵当権実行によってガーデンシティカンパニーGarden City Companyと名称変更し、かなりの土地が処分された。1930年には再び抵当権実行によって、20,000エーカーが処分され、社名にはTheがつけられてThe Garden City Companyとなった<sup>32)</sup>。

#### (4) 産業基盤の整備

製糖工場はカンザス州南西部に経済ブームを引き起こすとともに、産業基盤の整備に貢献した。製糖業の発展に伴って、灌漑水路、貯水池、鉄道、発電などが整備された。

半乾燥の気候の下での甜菜栽培は灌漑を必要とするため、アーカンザス川の水を分流する灌漑水路の整備が進んだ。フロンティア水路、サウスサイド水路、アラモ灌漑水路、アマゾン水路、グレートイースタン水路、ファーマーズ水路、ガーデンシティ水路などがあげられる<sup>33)</sup>。また、灌漑用水の安定的な確保のために、1907年に3,000エーカーの面積を有するマッキニー湖が建設された(図2参照)。1952年までは、ハートランドの近く

でアーカンザス川から取水された水がグレートイースタン水路を經由してマッキニー湖を満たした。この水路に対する訴訟問題と洪水の被害の結果、グレートイースタン水路の西端部が放棄され、水路管理費の55%をガーデンシティカンパニーが負担することを条件として、アマゾン水路から分水してマッキニー湖を満たすようになった<sup>34)</sup>。

ローカル鉄道も敷設された。ガーデンシティウエスタン鉄道(Garden City Western Railway)はフィニー郡内のみ軌道を有し、ガーデンシティ市街地の西端に位置した製糖工場から北西に向かって14マイルの長さを持つ(図2参照)。これは1916年に甜菜をガーデンシティの製糖工場まで運搬するために建設されたもので、オールドトゥービッツのニックネームで知られるボールドウィンロコモティブワークス社製の蒸気機関車(番号は25)が10~20両の貨車を牽引した<sup>35)</sup>。沿線の5か所にビートダンプと呼ばれる甜菜集積場が設けられ、収穫された甜菜が集められた。その後、この鉄道は公共目的のために利用されるようになり、3か所の穀物貯蔵庫(エレベーター)と3か所のアルファルファ乾燥工場が設けられた。夏には小麦の集荷でこの鉄道は活気をみせた<sup>36)</sup>。

また、ビートパルプ工場は1909年に建設されて、搾りかすを乾燥粉碎して家畜用飼料が生産された。この工場は1955年に製糖工場の閉鎖とともに売却された<sup>37)</sup>。

ガーデンシティの製糖会社は1916年には発電所(Garden City Irrigation and Power Company)を建設して、カンザス州南西部における電化に貢献した。ガーデンシティ、レーキン、ホルコム、ディアフィールド、インガルス各市が、この発電所から電気の供給を受けるようになった。この発電所は1959年にホイートランドエレクトリック社(Wheatland Electric)に売却され、今日でも発電事業が継続している<sup>38)</sup>。

### Ⅲ. ロシア系ドイツ人の流入

#### (1) ドイツ人からロシア系ドイツ人へ

18世紀後半にヨーロッパで展開した顕著な人口移動の一つとして、ドイツからロシアのヴォルガ川流域への集団移住がみられた。エカチェリーナ二世はヴォルガ川流域の草原を開発するために西ヨーロッパからの移住を促進する政策を実施し、旅費の支給、宗教の自由、文化の維持、兵役の免除など、さまざまな優遇措置を入植者に提供した。西ヨーロッパからは南北アメリカへの移住がみられたが、7年戦争による混乱や宗教的な理由により、多くのドイツ人がヴォルガ地域への移住を選択した。1764年にドイツ人の集団移住が始まってから3年間に、サラトフとクイビシェフを中心とした地域に100あまりのドイツ人入植地が形成された。それ以来、1世紀にわたってドイツ人はドイツ語とドイツ文化を維持しながら草原の環境に適応し、独自の社会と文化を保持する文化島を形成した<sup>39)</sup>。

しかし、ほぼ一世紀が経過して1870年代に入ると、アレクサンドル二世はそれまでドイツ系住民に与えられた優遇措置を撤廃してロシア化を推進し、こうして少数派集団に対する迫害が始まった。その結果、多くのドイツ人は南北アメリカへの移住を選択した。ヴォルガ地域からのロシア系ドイツ人の移住は1876年に始まり1920年まで続いた。彼らは、ヴォルガ地域の自然環境と類似した南北アメリカの草原地域を選択し、アメリカのグレートプレーンズ、カナダのプレーリー、アルゼンチンのパンパにヴォルガジャーマンの社会が形成された<sup>40)</sup>。

ロシアを後にしてアメリカ合衆国をめざしたヴォルガジャーマンは、ドイツ経由でニューヨークに上陸し、ネブラスカ州、カンザス州、コロラド州に定住した。故郷のヴォルガ地域と同様に、農業は彼らにとって重要な生業となった。カンザス州では、州都トピ

カを経由して州中部のヘイズ地域に定住した人びとが多かった。当時、カンザス州西部からコロラド州東部にかけて甜菜栽培が盛んになっており、アーカンザス川流域では、メキシコ人、日本人、ロシア系ドイツ人が農業労働に従事した<sup>41)</sup>。なかでも、家族で定住したヴォルガジャーマンは、後述するように子どもの数が多いので家族労働力に恵まれていた。移住先で多量の労働力を必要とする甜菜栽培を開始するためには、こうした家族構成は好都合であった。

#### (2) 連邦センサス調査票による住民属性の分析

ガーデンシティ地域におけるロシア系ドイツ人の存在を調べるために、アメリカ合衆国国立公文書記録管理局所蔵の連邦センサス調査票（1900年、1910年、1920年）を検討した。センサス調査員が手書きで書き込んだ連邦センサス調査票には、世帯主と家族の名前、年齢、渡米年、出生地、母語、両親の出生地、職業などの個人情報に掲載されており、住民の属性を知るための優れた一次資料である。

製糖工場が立地したフィニー郡で、製糖会社の所有地が集中したシャーロックタウンシップ（図2参照）を分析の対象とした。シャーロックタウンシップは162のセクションの面積を持つ南北に長い方形をしており、東流するアーカンザス川によって南北に分割される。右岸はサンドヒルズと呼ばれる砂丘地帯で粗放的な牧場として利用され、居住者は皆無に近かったと推察される。この砂丘地帯の開発が進んだのは、オガララ帯水層を利用したセンターピボット灌漑が普及する1970年代以降のことである。一方、左岸にはハイプレーンズ台地面が広がり、浅い地下水や河川水による灌漑化の進展によって集約的農業が展開し、甜菜栽培が盛んであった<sup>42)</sup>。連邦センサス調査票に記載された世帯番号から居住地を特定することはできないが、住民は左岸に集中していたと理解できる。



連邦センサス調査票に記載された住民の出生地について集計した結果が表1である。製糖工場が建設される以前の1900年には、シャーロックタウンシップに居住した総人口351人の97%がアメリカ生まれで、ロシア生まれの住民は皆無であった。1910年になると、総人口973人のうち422人が外国生まれで

あり、しかも388人(40%)がロシア生まれであったし、ドイツ生まれも22人いた。一方、アメリカ生まれの人口の48%はカンザス州で出生した。1920年には、外国生まれの人口は191人に減少し、これは1,081人の居住者の18%に相当した。60人を数えたメキシコ生まれの人口が10年間に急増したことがわかる

表1 カンザス州フィニー郡シャーロックタウンシップ居住者の出生地(1900~1920年) 単位:人

出生地	1900	1910	1920	出生地	1900	1910	1920
外国				中西部			
ロシア	0	388	100	カンザス	120	265	464
メキシコ	0	1	60	ミズーリ	34	40	137
ドイツ	2	22	7	イリノイ	46	57	47
アイルランド	6	0	0	インディアナ	19	55	16
スウェーデン	1	2	3	アイオワ	20	28	37
イングランド	1	0	4	ネブラスカ	4	6	42
ブラジル	0	0	5	オハイオ	23	14	15
カナダ	0	0	4	ウィスコンシン	3	3	7
北アイルランド	0	4	0	ミネソタ	0	11	1
ボヘミア	0	0	3	ミシガン	4	3	2
アルゼンチン	0	0	2	北東部			
ギリシャ	0	2	0	ニューヨーク	12	3	4
ベルギー	0	0	2	ペンシルヴェニア	12	3	3
ウェールズ	0	0	1	ヴァーモント	3	0	0
スイス	1	0	0	メーン	2	0	0
スコットランド	1	0	0	ニューハンプシャー	1	0	0
ヨーロッパ	0	2	0	マサチューセッツ	0	0	1
外国合計	12	422	191	西部			
南部				コロラド	3	46	53
ケンタッキー	10	2	11	ニューメキシコ	1	0	2
オクラホマ	2	5	15	カリフォルニア	0	0	2
テキサス	2	0	14	ユタ	0	0	2
ウエストヴァージニア	9	3	0	ワシントン	0	1	0
アーカンソー	3	0	5	モンタナ	0	0	1
テネシー	4	1	3	アメリカ合衆国	0	2	1
ヴァージニア	0	0	2	判読不能	1	0	1
ジョージア	1	1	0	アメリカ合衆国合計	339	549	890
ノースカロライナ	0	0	1	海洋上	0	2	0
ルイジアナ	0	0	1	総計	351	973	1,081

アメリカ合衆国センサス調査票 (Twelfth Census of the United States, Schedule No.1, Population, Kansas, Finney County, Sherlock Township; Thirteenth Census of the United States: 1910 Population, Kansas, Finney County, Sherlock Township; Fourteenth Census of the United States: 1920 Population, Kansas, Finney County, Sherlock Township) により集計。

が、ロシア生まれが100人（9％）で依然として多数派であった。カンザス州生まれは464人（43％）に増加した。

シャーロックタウンシップに居住したロシア系ドイツ人（ロシア生まれのドイツ人）およびロシア系ドイツ人二世（両親がロシア系ドイツ人）を抽出し、出生地別にまとめたのが表2である。1910年には、ロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世は573人で、これは全人口の59％を占めた。外国生まれのロシア系ドイツ人は、アルゼンチン、ドイツ、メキシコで生まれた3人を含めて391人を数えた。アメリカ生まれのロシア系ドイツ人二世は、海洋上で生まれた2人を含めて182人であり、彼らの大多数（94％）はカンザス州と

表2 カンザス州フィニー郡シャーロックタウンシップ在住のロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世の出生地（1910年・1920年）

単位：人		
出生地	1910年	1920年
ロシア	388	100
ブラジル	0	5
アルゼンチン	1	2
ドイツ	1	1
メキシコ	1	0
外国合計	391	108
カンザス	134	103
コロラド	36	27
オクラホマ	2	3
アイオワ	2	0
ネブラスカ	2	0
ミズーリ	2	0
ウィスコンシン	1	1
カリフォルニア	0	1
ワシントン	1	0
アメリカ合計	180	135
海洋上	2	0
総計	573	243

アメリカ合衆国センサス調査票（1910年および1920年）により集計。

コロラド州で出生した。つまり、1910年には移民一世がアメリカ生まれの二世の2倍強であったことがわかる。

1920年にはロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世は243人に減少しており、これはタウンシップの全人口の22％であった。こうした人口減少に加えて、彼らの構成は大きく変化した。アメリカ生まれの二世が135人を数え、移民一世を大幅に上回った。カンザス州とコロラド州での出生者が130人であった。一方、108人の一世のうち、100人はロシア生まれであったが、ブラジル、アルゼンチン、ドイツ生まれも若干名いた。

以上のように、1910年にはロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世はシャーロックタウンシップの住民の過半数を占め、しかもそのなかで移民一世が多数を占めたことが明らかになった。また、1910年から1920年にかけてタウンシップの総人口は11％増加したが、ロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世は58％も減少した。その人口構成も変化した。アメリカ生まれの二世が移民一世を上回った。このことは、ロシア系ドイツ人一世と二世の移動性が高かったことを示唆する。

そこで、1910年と1920年の連邦センサス調査票に記載されたロシア系ドイツ人世帯の渡米年を表3に示した。1910年の居住者（103世帯）のなかには、1865年の渡米者を含めて19世紀後半に渡米した12世帯がいたが、多くは1900年代の渡米であった。とくに1907年の23世帯をピークとして、1906年と1908年にそれぞれ13世帯が、1905年に9世帯が移住した。1906年11月にはガーデンシティの製糖工場が操業を開始しており、これが吸引力となってロシア系ドイツ人がこの地域に流入したと考えられる。知人や親戚のネットワークがこのような移住パターンを生み出したと推察されるが、どのようなリクルートのしくみが実際に存在したのかについては今後の課題である。

表3 カンザス州フィニー郡シャーロックタウンシップにおける  
1910年および1920年のロシア系ドイツ人世帯の渡米年

単位：世帯

渡米年	1910年	1920年	渡米年	1910年	1920年	渡米年	1910年	1920年
1865	1	0	1898	2	0	1907	23	2
1874	0	1	1899	4	0	1908	13	1
1876	1	0	1900	7	3	1909	5	1
1877	1	0	1902	10	1	1910	4	1
1880	0	1	1903	3	0	1911	—	8
1885	2	0	1904	2	1	1912	—	2
1889	0	1	1905	9	0	1913	—	3
1891	1	1	1906	13	2	1914	—	2

不明：1910年2世帯、1920年2世帯 アメリカ生まれ世帯：1920年4世帯  
アメリカ合衆国センサス調査票（1910年および1920年）により集計。

1920年連邦センサス調査票では、シャーロックタウンシップにおいて37のロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世の世帯が数えられた。このうち世帯主がアメリカで生まれた二世世帯は4であり、不明の2世帯を除いて、31世帯の世帯主が移民として渡米した。彼らのうち、19世紀の渡米者は4人であり、1900年から1910年にかけての渡米者は12人であった。ただし、1910年の在住者の渡米のピークであった1907年に渡米したものは2名にとどまった。もっとも多かったのは1911年の渡米者（8人）であり、1911年から1914年にかけての渡米者が15世帯を数えた。

すなわち、ドイツ系ロシア人住民には入れ替わりが激しかったことが推察される。そこで、1910年と1920年のロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世の名前を照合して、1910年の在住者が1920年にも引き続き居住していたのかどうか調べた。1910年連邦センサス調査票の記載が不明瞭でマイクロフィルムの保存状態がよくないため、完全な照合はできなかったが、判読できる範囲で確認できたのは1世帯のみであった。すなわち、1910年にシャーロックタウンシップに在住した103のロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世世帯のうち、1920年にも引き続き居住していた

のは1世帯のみであった。このことは、少なくともこのタウンシップに関してみると、ロシア系ドイツ人がほとんどそっくり入れ替わっており、すなわち定住率が低かったと解釈できる。

ロシア系ドイツ人人口が多かった1910年について、シャーロックタウンシップのロシア系ドイツ人・ロシア系ドイツ人二世の103世帯の詳細を示したのが表4である。外国生まれとアメリカ生まれを含めて、一般に子ども数が多いことが明らかで、豊富な家族労働力は甜菜栽培にとって重要であったと考えられる。世帯主の職業については、ほとんどが農業者と記載されており、彼らは甜菜栽培に従事していたと推察される。また、甜菜請負という記載も相当数みられた。ヴォルガジャーマンがこの地域の甜菜栽培を支えていたことを理解することができる。なお、農業以外の職業は鍛冶屋が1人のみであった。

### (3) 2家族の移住史

1950年代の甜菜糖産業の崩壊に伴ってヴォルガジャーマンの社会は消滅したが、ガーデンシティ在住の二人のヴォルガジャーマンに聞き取り調査を行うことができた。2家族のヴォルガジャーマンの移住プロセスをあげて

表4 カンザス州フィニー郡シャーロックタウンシップにおける103のロシア系ドイツ人世帯（1910年）

世帯番号	世帯主	妻	子ども等		移住年	職業
			外国生まれ	米国生まれ		
1	63	26	F2	M0	1908	H農業
2	26	21	F1		1908	H農業
3	42	41	M20 F17 M14	M12 M7 M5 M4 M0	1899	H農業
4	46	44	F17 F15 F13 F11 F9 M7 F4		1908	H農業
5	61	45		M24 F18 M15 F12 F9 M6	1877	H農業 M24農業
6	38	ARG33		F16 F14 M12 M10 M8 F4 M1	1876	H農業
7	36	31	M5	F3 M0	1906	H農業
8	33	33	M13 M11 F9 M7 M5	F2 M0	1906	H農業
9	35	40	M13 F8	F5	1903	H農業
10	24	24		M0	1908	H農業
11	20	20		F0	1906	H農業
12	45	46	HF64 M19 M16 F13		1905	H農業
13	25	25		M2	?	H農業
14	23	21			1906	H農業
15	45	45	F16		1908	H農業
16	(27)	19	(HB35)		1902	
17	21	23	HF67 HM55 HS10	F0	1905	H農業 HF農業
18	53	50	M20 M15 M12 F8		1905	H農業
19	32	29	F6 M4 F2		1905	H農業
20	30	29		F7 M6 M5 M2 M0	1900	H農業
21	39	38	F15 F12	F8 F6 M4 M2	1900	H農業
22	65	51	M25(AS)	M20 M17 F15 F13 F12	1885	H農業 M25鍛冶屋
23	52	55	F19 M25 F20 F1		1909	H農業
24	27	27		F0	1909	H甜菜請負
25	39	38	F17 M13 M11 F9 M7 M4 F2	M0	1908	H農業
26	21	21		F1	1908	H農業
27	35	29	F7 M5	F2 F0	1905	H甜菜請負
28	33	30	F12 M9 HB30	F5 F3	1902	H農業 HB農業
29	35	25		F6 F3 M1	1902	H農業
30	36	38	F15 M11 M4	M1	1907	H甜菜請負
31	34	36	F13	F11 M9 M5 M2 F0	1898	H農業
32	55	46	M22	M18 M15 F11 M8 F5	1891	H農業
33	37	36	M10	F4 F1	1905	H農業
34	35	—		M25 M19 F17 M13 F12 F10 F8 F6 M3	1865	H農業 M25農業労働
35	36	35	F13 F11	M9 M7 M5	1900	H甜菜請負
36	42	43	F13 F10	F7 M5	1902	H農業
37	41	40	F14 M12 F5	M2	1907	H農業
38	29	27	F8 F4	M0	1907	H甜菜請負
39	34	29	F6 M4	F1	1907	H農業
40	39	30	M5	F0	1907	H農業
41	47	46	M24 F14		1907	H甜菜請負
42	30	28	M7 F5 F3	F1	1907	H甜菜請負
43	30	28	M5 F3	F1	1907	H甜菜請負
44	47	45	M18 M16 M9 F7		1907	H農業
45	25	21		M0	1907	判読不能
46	38	34	F16 F14 F6 F5 F4	M1	1907	H農業
47	35	25	F6	F5 M1	1907	H農業
48	34	30	M6 M3		1907	H農業
49	62	24		M1	1907	H農業
50	36	33	M7 F5	M3 M1	1907	H農業
51	45	38PG		F19 M17 M14 F12 F10 F9 F7 F5 F3 F0	1885	H農業
52	61	54	M24 M21 F15		1907	H農業

53	30	29	F3		1907	H 農業
54	34	31	M6 F4	F0	1907	H 甜菜請負
55	52	53	M17 F14		1907	H 農業
56	30	31			1906	H 農業
57	24	23		F3 F2 M0	1899	H 農業
58	45	41	M20 M17 M14 N/F21	M7 M5 M0	1900	H 農業
59	27	23	M3 HB24	M0	1908	H 農業
60	24	24	M7	M5 M3 F0	1906	H 甜菜請負
61	53	40	F18	M12 M9	1898	H 農業
62	25	23		F2 M0	1906	H 農業
63	27	22		M2 M0	1906	H 農業
64	26	27	F8 M3	M1	1901	H 甜菜請負
65	23	22		F0	1906	H 農業
66	50	50	M18 M13 M11 F9 F5		1907	H 甜菜請負
67	63	—	M23 M17 M16 F13 F11		1909	H 農業
68	32	27	F7 F6 F1		1909	
69	33	30	F10 F5 F3 F0		1910	H 甜菜請負
70	38	21		M2	1903	H 甜菜請負
71	27	26	F4	M3 M0	1907	H 農業
72	42	42	M12 M11 F10 M8	F6 M1	1904	H 農業
73	27	24	M6 M5	F1	1907	H 農業
74	37	38	F16 M14 M12	F9 M7 F6 M4 F3 M0	1900	H 農業
75	30	25	F3 F1		1900	H 甜菜請負
76	43	39	F15 F9	M7 F3 M0	1902	H 甜菜請負
77	31	28		M3 M1	1906	H 農業
78	35	34	M10 F6	M2 M0	1904	H 農業
79	29	28	F?	F3 F1	1906	H 甜菜請負
80	36	22		M4 F3 F2	1903	H 農業
81	42	42	M5	M3 F3	1905	H 農業
82	20	18			1905	?
83	30	23	M0		1910	H 甜菜請負
84	31	31	M16 M14 F10 M8 F6		1908	H 甜菜請負
85	35	30		F3	1906	H 農業
86	44	45	F18 F14 F12 M9 M7 M5 F1(AS)		1909	H 甜菜請負
87	35	27		F6 F4 M3 M1	1900	H 農業
88	52	47	M23 M17 M6		1910	H 農業
89	26	25	F4 M2	F0	1909	H 甜菜請負
90	29	20		F2 F0	1902	H 農業
91	31	31			1910	H 農業
92	38	36	M13 M11 M8 F6 M4	F0	1906	H 農業
93	22	21		M0	?	H 甜菜請負
94	38	32	M10 M8 M5	M3 F1	1900	H 農業
95	30	30	F10	F7 M4 F2 F0	1902	H 甜菜請負
96	36	35	F15 F13 F11 M9 M5 HM72	F2 M0	1905	H 甜菜請負
97	32	23	F4 M2		1908	H 甜菜請負
98	23	24	F3	M1	1908	
99	53	55	M17		1899	H 甜菜請負
100	25	20		F3 M2 M1 F0	1899	H 甜菜請負
101	25	24			1902	H 農業
102	43	32	F10	F6 M4 F3 M0	1902	H 農業
103	32	23		F2	1902	H 甜菜請負

HF：世帯主の父　HM：世帯主の母　HB24：世帯主の兄弟・24歳　HS10：世帯主の妹・10歳

M20：男性20歳　F18：女性18歳　(27)：非ロシア系ドイツ人・27歳

(HB35)：世帯主の兄弟・35歳・非ロシア系　ARG33：アメリカ生まれのロシア系ドイツ人・33歳

AG40：アメリカ生まれのドイツ系・40歳　N/F21：21歳・姪　AS：海上生まれ

H 農業：世帯主の職業がfarmer　H 甜菜請負：世帯主の職業が甜菜のcontractor

アメリカ合衆国1910年センサス調査票 Thirteenth Census of the United States: 1910 Population, Kansas, Finney County, Sherlock Township より集計。

みたい。

アルヴィン・コムロフスキーの場合は、父親が1904年にロシアのサラトフ近郊のフサレン村で生まれたが、1912年に祖父がアメリカに移住し、1年後に父親を含めた家族全員が移住した。祖父はニューヨークからミネソタに移って林業労働に従事し、さらにコロラド州プエブロに落ち着いた。1年後に移住した家族はプエブロで祖父と合流した。祖父は1914年にコロラド州北東部のスターリングで甜菜農場の労働者となり、さらに借地により甜菜栽培を始めた。彼と一家は1922年にカンザス州ガーデンシティに転居し、製糖会社のガーデンシティカンパニーから160エーカー(NW1/4, セクション20, T23SR33W)を借地して甜菜などを栽培した。アルヴィンは1925年にガーデンシティで生まれたが、1930年には家族は再びスターリングに戻った。祖父は1939年まで甜菜栽培に従事したが、アルヴィンの父親は1937年にスターリングからガーデンシティに移り、ガーデンシティカンパニーから160エーカー(NW1/4, セクション27, T23SR33W)を借地して甜菜などの栽培にあたった。父親は1954年まで借地農を続けた<sup>43)</sup>。

ラウル・ラップの父親は、カンザス州トピカ郊外の集落で1884年に生まれ、母親も同じくカンザス州内で生まれた。父方の祖父は父親が幼少期に亡くなったため詳細は不明であるが、ロシアから移住したドイツ人であった。カンザス州ネス郡南東部で借地により小麦などの非灌漑農業を行ったが、その後、ネスシティの南西近郊のポーニークリーク川流域で甜菜栽培を行うようになった。この甜菜畑を担当していた農場監督がガーデンシティ地域の甜菜畑も監督しており、労働力不足に直面したガーデンシティで働くようにリクルートされた。ガーデンシティへの転居費用は製糖会社が負担したという。なお、ラウル・ラップは1918年にガーデンシティで生まれ、1941年に第二次世界大戦が始まると軍に

入った。退役後は農業には戻らず、ガーデンシティで仕事に就いた。160エーカーの農場では両親が農業を続け、彼らが引退すると、長兄が農業を継いだ<sup>44)</sup>。

ガーデンシティカンパニーの小作農はドイツ系農民で、1930年代末から1940年代にかけて、全体で約50家族を数えた。ロシア系ドイツ人は46家族で、カトリック教徒であった。ドイツ出身のドイツ系家族(ルーテル派)は4家族ほどいた。ロシア系ドイツ人家族は日常的にドイツ語を話したので、子どもたちは小学校に入学した時には英語を話すことが全くなかったという<sup>45)</sup>。

このように、ガーデンシティカンパニーが所有する農場では、甜菜栽培に従事するヴォルガジャーマンによるいわゆる文化島が形成されていたわけである。甜菜栽培とロシア系ドイツ人農民についてさらに詳しく検討してみたい。

#### IV. 甜菜栽培と製糖

##### (1) 直営農場

製糖工場の存立のためには原料の甜菜を安定して確保することが重要な課題であった。別稿で論じたように、原料調達には直営農場方式、農場分譲方式、契約栽培方式、小作農方式という4つの類型が認められ、アーカンザス川流域の製糖工場では、会社の経営方針に基づいて異なる方式が採用された<sup>46)</sup>。ガーデンシティの製糖工場の場合、1906年から1920年までは、製糖会社が土地と農機具を所有し、甜菜を自社生産するという直営農場方式が試みられた。設立当初の会社名The United States Sugar and Land Companyがこうした経営方針を物語っている。

当時の土地分割状況を明らかにする資料として、火災保険証書の写しが残っている<sup>47)</sup>。日付は記載されていないが、ユナイテッドステートシュガーアンドランドカンパニー名義で契約がなされていることから、ガーデンシ

ティシュガーアンドランドカンパニーに社名が変更される前の1913年以前のものであることがわかる。

この火災保険証書に記載されているのは、住宅が140軒、納屋・付属建築物が149軒、労働者用小屋が140軒であった。建物の評価額は、住宅550ドル、納屋・付属建築物150ドル、労働者用小屋175ドルが標準的であり、総評価額は125,225ドル（内訳は、住宅79,700ドル、納屋・付属建築物22,950ドル、労働者用小屋22,575ドル）であった。補償額は評価額の半額の62,612.50ドルとされた。

火災保険の対象となる建造物が存在したのは146の小区画であった（図4）。区画規模をみると、4分の1セクションをさらに2等分した80エーカー区画が典型的で、これが119区画を数えた。また、160エーカー区画は25、320エーカー区画は1、40エーカー区画は1であった。以上を合計すると、区画面積の合計は13,880エーカーとなる。これらの区画のなかで、住宅、納屋・付属建築物、労働者用小屋がセットになった区画は101区画あった。図4の拡大図には、甜菜栽培の中心をなしたシャーロックタウンシップの一部の地区について、農場区画と建物群の構成を示した。1910年代初頭においては、住宅、納屋・付属建築物、労働者用小屋を有する80エーカーの会社所有区画が、直営農場方式による甜菜栽培の基本的な単位となっていた状況を理解することができる。

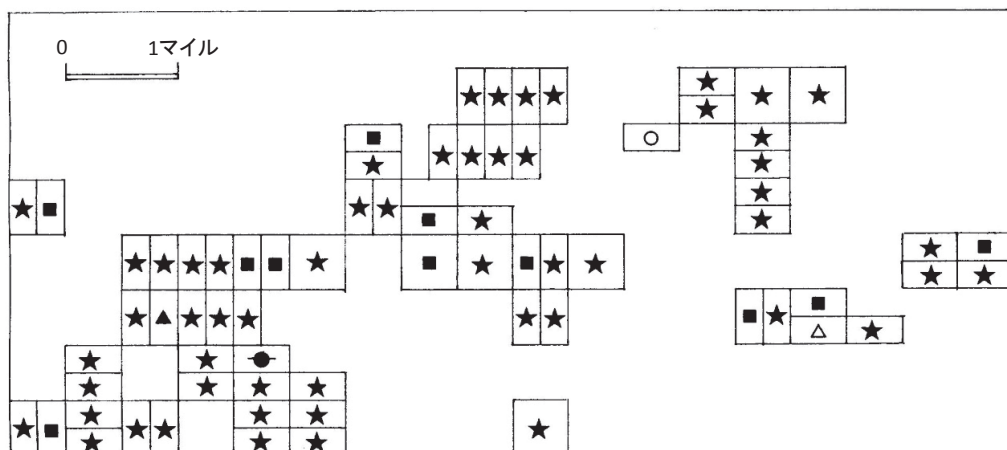
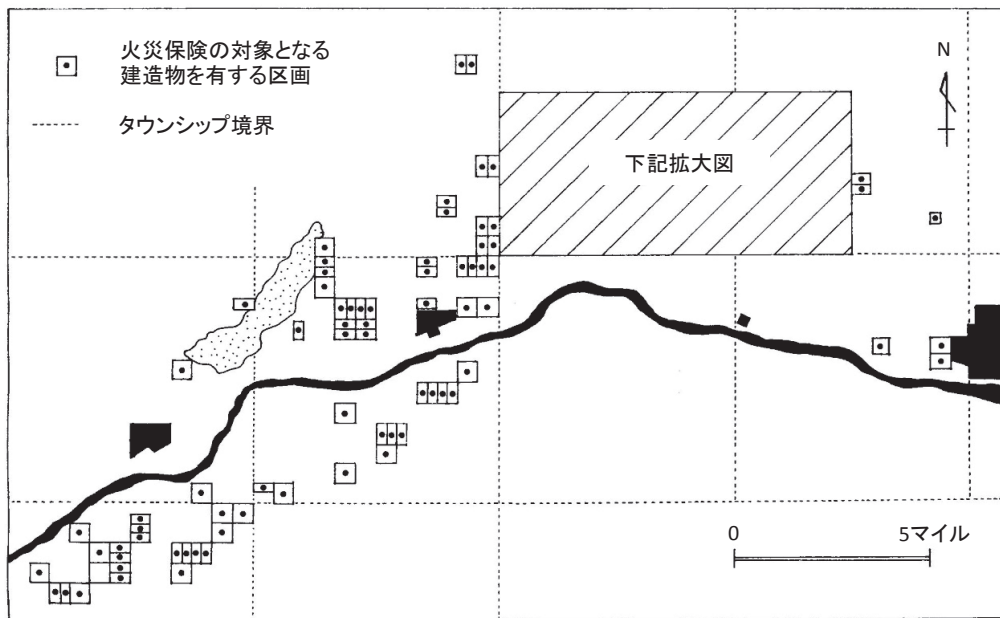
ヴォルガジャーマンの家族は住込み労働者であり、このような会社所有の区画に住み込んで、会社が所有する農機具を使用し、会社が提供する甜菜種子を用いて、会社の指導の下で甜菜栽培にあたったと推察される。ただし、製糖会社の管理下における甜菜栽培を復元するための資料は少ない。ユナイテッドステートシュガーアンドランドカンパニーが1913年2月20日に発行した6頁のパンフレットがある<sup>48)</sup>。これは、圃場の準備、種子の筋

蒔き、間引き、耕作、収穫、灌漑について、甜菜栽培を説明したガイドブックであった。灌漑の部分を見ると、灌漑は冬か春に行い、水分を逃がさないようにすること、作付けしてから灌漑する場合には、圃場を水平にすること、V字型の溝を設けること、作物が水につからないようにすることなどが説明される。労働者の雇用に関する資料は残されていないが、製糖会社が自社農場で住込み労働者を利用して甜菜栽培を行った状況をうかがうことができる。

## (2) 小作農方式

1921年に法人組織の農場経営を禁止するカンザス州法が施行されると、甜菜栽培は製糖会社による直営農場方式から小作農方式への転換が行われた<sup>49)</sup>。1930年代から1940年代にかけての甜菜栽培については、前述のコムロフスキーとラップからの聞き取り調査によってある程度の状況が把握できた。

小作農場の基本的な単位は4分の1セクション（160エーカー）で、コムロフスキー家もラップ家もこの規模の区画を借地した。直営農場方式の時代には80エーカーが典型的な区画であったことを考慮すると、小作農場の規模は2倍に拡大した。ただし、灌漑水路に加えて住宅と労働者用住宅、納屋などがかなりの面積を占めたので、実際の耕作面積は120エーカー程度であった。通常、甜菜を40エーカー栽培したが、その栽培面積は農場監督者との相談により毎年決められた。甜菜のほか、マイロ（ソルガム）を40エーカー、干し草用のアルファルファを40エーカー栽培した。これらの3つの作物は輪作され、アルファルファを3年から5年ほど栽培した後に甜菜を2年、そしてマイロを1年栽培し、再びアルファルファに戻すというのが一般的であった。アルファルファは平均して年に4回収穫できたし、マイロの収穫期は10月であった<sup>50)</sup>。



- ★ 住宅+納屋・付属建造物 +労働者用小屋
- 住宅+納屋・付属建造物
- ▲ 住宅
- 納屋・付属建造物+労働者用小屋
- 納屋・付属建造物
- △ 労働者用小屋

図4 カンザス州フィニー郡シャーロックタウンシップにおけるユナイテッドステーツシュガーアンドランドカンパニーの土地区画と建造物

United States Sugar and Land Companyの火災保険証書写し (Saint Paul Fire & Marine Insurance Company) により作成。

甜菜の播種は、降霜の終わった春、通常は4月から5月にかけて行われた。甜菜が十分に伸びるように、1フット (30cm) の深さまで耕し、畝の間隔は22インチ (56cm) にし

た。播種作業には馬の牽引によるドリルが使用された。ある程度成長すると、柄の短い鋤を用いて手作業で間引きし、甜菜の株間を12~14インチ (30~36cm) にあけた。除草は柄



の長い鍬を使って手作業で行われた。ガーデンシティカンパニーの農場監督が農作業の指導・監督にあたった。灌漑はマッキニー湖から東に延びるグレートイースタン水路から導水して行われ、ディッチライダーと呼ばれる灌漑水路番が灌漑水路を管理した<sup>51)</sup>。

甜菜の収穫は、10月下旬から11月上旬にかけて、糖度が定められた比率に達すると始められ、11月下旬まで続いた。エーカー当たりの収量は15～20トンであった。甜菜を引き抜くためにビートプラーが2頭の馬で牽引された。引き抜かれた甜菜の葉の部分は、刃渡り14インチで刃先がかぎ型に曲がったトップナイフで切り落とされ、家畜の飼料に利用された。20畝を単位として、10畝と10畝との間に甜菜を積み上げた。それを大型のシュガービートフォークでトラックに積み込んだ。このフォークの先には親指の先ほどの丸い玉がついており、甜菜に突き刺さらないようできていた。トラックに積み込まれた甜菜は、鉄道沿いの甜菜集積場まで運ばれ、担当技師によって計量・記録された。貨車に積み込まれた甜菜は、ガーデンシティの製糖工場に運ばれた<sup>52)</sup>。

160エーカーの区画には小作農の居住用として製糖会社が1920年代に建設した同一規格の正方形4部屋住宅があり、ガーデンシティの甜菜地帯の特徴的な景観をなした。この住宅は24フィート（7.32メートル）四方の正方形の簡素な平屋で、2つの寝室、リビングルーム、台所の4部屋から構成され、それぞれの部屋は12フィート四方の正方形であった。玄関を入るとリビングルームがあり、台所には勝手口がついていた。なお、生活用水は風車式ポンプで地下水（地下水水面は20フィート）を揚水して利用した。1947年にはガーデンシティカンパニーが60フィートの深井戸を掘った<sup>53)</sup>。

甜菜の収穫量を高めるためには肥料が必要なため、ガーデンシティカンパニーは小作農

が農場で家畜を飼育することを奨励した。コロラド州の小規模農民がよくやっているように、堆肥が作られて、春に圃場に投入された<sup>54)</sup>。コムロフスキー農場では、2頭の農耕馬、3頭の乳牛（後に7頭に増加）、300羽の鶏、数等の豚を飼育した。牛肉、豚肉、鶏肉と鶏卵は自給し、それ以外の食料品は購入した。また、余分の鶏卵とクリームは販売した<sup>55)</sup>。

食料品、衣類、雑貨、ガソリンなど、すべての物品はガーデンシティの商店でガーデンシティカンパニーの購入伝票を使って処理された。したがって、小作農とその家族が日常生活を営む上では現金はほとんど必要なかった。毎年1月に前年分の精算が行われ、甜菜などの農産物の販売額から様々な支払いを差し引いた金額が小作農に支払われた<sup>56)</sup>。

ガーデンシティカンパニーが小作農から徴収する小作料は、コムロフスキーによると、甜菜の5分の1、マイロの3分の1、干し草の2分の1であり、それはずっと変わらなかったという<sup>57)</sup>。

甜菜農場では、播種、間引き、除草、収穫を含めて多量の労働力が必要であり、ヴォルガジャーマン世帯の人数が多いとはいっても、家族労働力では到底まかなうことはできなかった。1930年代まではニューメキシコやアリゾナからネイティブアメリカン労働者が導入された。次に、テキサスやカンザスのメキシコ系アメリカ人が雇用された<sup>58)</sup>。コムロフスキー農場では、メキシコ人家族が農場内の労働者小屋に住んでいたし、ガーデンシティに居住して農場に通うメキシコ人労働者も多かった。労働者の賃金は、間引き作業にはエーカー当たり8ドル、除草の場合にはエーカー当たり2ドルが支払われた<sup>59)</sup>。

第二次世界大戦中は、労働力不足を補う措置として実施された米墨政府間協定（いわゆるブラセロ計画）に基づいて、メキシコ人が農業労働力として導入された。また、太平洋

岸に設定された軍事地域から日本人と日系アメリカ人が内陸の強制収容所に隔離されたが、アマチエ強制収容所がコロラド州南東部のグラナダにあり、ここから日系人が甜菜の収穫に動員されたこともあった。1942年11月上旬には、収穫の労働力不足を補うための措置として、315人の日系アメリカ人収容者がアーカンザス川流域の6つの郡に導入された。日系人は甜菜生産の経験を持っており、コロラド州やネブラスカ州の甜菜地帯でも収穫労働に従事した<sup>60</sup>。

### (3) 製糖

ガーデンシティの製糖工場では、1906年の11月15日に製糖が始まり、翌年の2月18日まで108日間にわたって操業した。製糖工場の操業はキャンペーンと呼ばれた。表5は1906年から1955年までの製糖の概要をほぼ5年間隔で示している。初年度の甜菜処理量は66,031トンで、日平均の処理量は629トン、砂糖生産量は100ポンド袋で88,627袋であった。操業日数、甜菜処理量、砂糖含有率、砂糖生産量にはいずれも大きな変動があったことがうかがえる。50年間を平均すると、1シーズンの甜菜処理量は52,490トン、砂糖生産量は

134,662袋であった。砂糖生産量の最大は1933年の278,231袋であった。理由は不明であるが、1919年は製糖量が極端に少ない例外的な年で、砂糖生産量は17,595袋であった。

製糖工場のキャンペーンが始まると、製糖作業は昼夜間断なく行われた。1938年までは、操業期間中に200~300人が雇用され、12時間交替制で労働に従事した。1938年に労働時間賃金法(Wage and Hour Act)が施行されると、製糖工場は3交代制(第1シフトは午前8時から午後4時まで、第2シフトは午後4時から深夜12時まで、第3シフトは深夜12時から午前8時まで)で操業されるようになり、350~400人が雇用された。ガーデンシティカンパニーの常勤労働者は60人程度であった<sup>61</sup>。

ガーデンシティ製糖工場の甜菜処理量の経年変化をみたのが図5である。製糖工場が操業を開始して間もない時期から1920年代末までは、50年間の甜菜処理量の年平均値(52,490トン)を下回る年が大多数を占めた。1930年代から1940年代はじめにかけては甜菜処理量の多い年が続いた。その後、最終年にあたる1955年までは、1930年代の処理量を下回る年が多かった。

表5 ガーデンシティ製糖工場の操業(1906~1955年)

年次	終了年月日	操業日数	甜菜処理量 (トン)	砂糖含有率 (%)	砂糖生産量 (100ポンド袋)
1906	1907.2.18	106	66,031	12.1	88,627
1910	1910.12.30	74	56,786	16.7	166,772
1915	1915.12.19	45	34,877	14.5	91,516
1920	1920.12.30	85	53,260	13.96	120,157
1925	1926.1.8	78	65,545	13.05	150,350
1930	1930.12.28	66	50,303	12.48	113,923
1935	1935.12.10	48	39,027	15.11	109,406
1940	1941.2.10	113	123,215	13.33	273,693
1945	1945.12.2	46	50,095	15.75	144,176
1950	1950.12.2	50	56,888	13.42	135,125
1955	1955.12.16	72	83,877	13.90	205,406

The Garden City Company "Campaign Comparison Sheet" により作成。

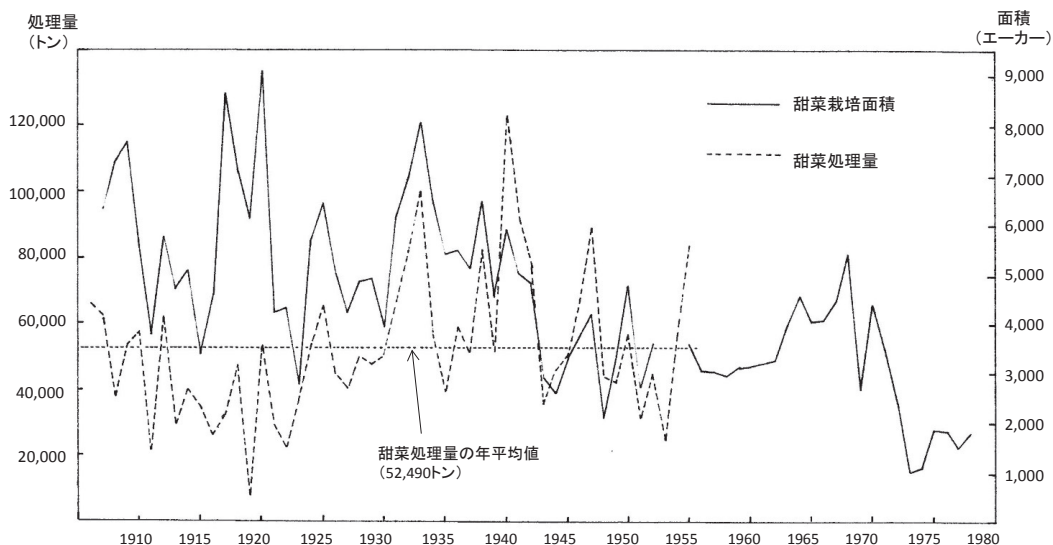


図5 ガーデンシティ製糖工場の甜菜処理量とフィニー郡の甜菜栽培面積

Kansas State Board of Agriculture 資料およびThe Garden City Company “Campaign Comparison Sheet” により作成。

図5にはフィニー郡の甜菜作付面積の推移も示される。甜菜作付面積もかなり大幅に変動しており、1910年代末に作付面積が大きく、1920年代にピークに達した。その後、1920年代に減少するが、1930年代に再び増加した。1940年代には一般に減少傾向を示した。1955年の製糖期をもってガーデンシティの製糖工場が操業を終了した後、1960年代に一時増加傾向を示したが、1970年代に入って急激に減少した。

ガーデンシティの製糖工場の甜菜集荷圏がどの範囲に及んでいたのかについては、検討のための資料がない。ただし、図5から次のように推察することができる。エーカー当たりの甜菜生産量を15トンとして計算し、面積（エーカー）と処理量（トン）の目盛りを対照できるようにしてある。1930年代末までは、フィニー郡の甜菜栽培面積は、理論的にはガーデンシティの製糖工場処理される甜菜を上回る量を生産することができた。しかし、1940年代以降は、ガーデンシティの製糖

工場処理される甜菜の量を供給できなくなった。つまり、ガーデンシティの製糖工場はフィニー郡以外の地域から甜菜の供給を受けなければならなくなったと推察できる。このため、1940年代初頭には、ガーデンシティカンパニーの甜菜集荷圏は、西はコロラド州境のクーリッジから東はグレートバンドまで、北はスコットシティやネスシティまでの広範囲に及んだ<sup>62)</sup>。なお、ガーデンシティの製糖工場が閉鎖された後は、フィニー郡の甜菜はアッチソントピカアンドサンタフェ鉄道によって、アーカンザス川上流の製糖工場に輸送された。

#### (4) 甜菜糖産業の崩壊

1906年に製糖を開始したガーデンシティ製糖工場は、アーカンザス川流域に甜菜糖産業を基盤とした顕著な文化島を形成した。それは、広大な農地、独自の灌漑システム、鉄道、発電所、数百人の小作農民を持つ、ほぼ自己完結的な組織であった。しかし、ガーデ

ンシティカンパニーは1955年に製糖工場をホーリーシュガーカンパニーに売却して製糖事業から撤退し、28,000エーカーの土地を経営する農産会社となった。今日でも小作農が農業を続ける一方、所有地には石油と天然ガスの井戸を所有する。

ガーデンシティの製糖工場を買収したホーリーシュガーカンパニーは、工場を稼働することなく、甜菜割り当て面積を獲得して、上流で同社が経営するスウィnk工場への甜菜供給量を確保した。しかし、1958年に同社はスウィnk工場を閉鎖し、すべての施設と不動産はデンバーのアメリカンクリスタルシュガーカンパニー American Crystal Sugar Company に売却された<sup>63)</sup>。アーカンザス川上流のシュガーシティにはナショナルシュガーマニュファクチャリングカンパニーがあったが、1967年に倒産した<sup>64)</sup>。

最後まで操業を続けたのはロッキーフォードの製糖工場で、アーカンザス川流域の甜菜生産者が経営するコロカンシュガー会社 Colo-Kan Sugar, Inc.がアメリカンクリスタルシュガーカンパニーから製糖工場を賃借して操業を続けた。しかし、この事業は1976年に赤字に転落し、2年後に操業を停止した。こうして、アーカンザス川流域の製糖業は幕を閉じた。

## V. おわりに

アメリカ西部の開拓と発展を論じる際に砂糖は一つのキーワードである。本稿では、カンザス州南西部のフィニー郡ガーデンシティを中心とする地域を研究対象として、20世紀初頭からの半世紀間の製糖業の展開を、製糖工場とヴォルガジャーマンと呼ばれるロシア系ドイツ人に着目することにより明らかにした。

ガーデンシティの製糖工場はアーカンザス川流域ではもっとも下流に位置し、コロラド資本と地元の実業家の協力により1906年に操

業を開始した。アーカンザス川左岸の灌漑水路に沿って広大な農地を所有したが、郡役所の不動産登記簿に基づいて土地所有を復元することができた。灌漑水路や貯水の整備、甜菜運搬用の鉄道建設、発電事業、ビートパルプ工場など、ガーデンシティの製糖会社はカンザス州南西部の経済に大きな影響を及ぼした。

半乾燥地域における甜菜糖産業を論じる際に労働力は重要な要素である。19世紀末から20世紀初頭にかけてロシアのヴォルガ川流域からアメリカに移住したロシア系ドイツ人は、ヴォルガジャーマンと呼ばれ、甜菜栽培に重要な役割を演じた。連邦センサス調査票の詳細な分析から、ヴォルガジャーマンの属性が明らかになった。また、2名のヴォルガジャーマンからの聞き取り調査により、砂糖産業を基盤としたエスニック社会の特徴を把握することができた。ヴォルガジャーマンは、ガーデンシティの製糖会社所有の農場で、当初は住込み労働者として甜菜栽培に従事し、さらに1920年代以降は小作農として甜菜糖産業を支えた。

しかし、1906年から続いたガーデンシティの製糖工場は1955年に閉鎖された。甜菜糖産業の崩壊に伴って、多くのヴォルガジャーマンは仕事を求めてガーデンシティを去り、彼らのエスニック社会も姿を消した。聞き取り調査に応じてくれた2名のヴォルガジャーマン高齢者は、ガーデンシティに居住し続けた少数派であった。こうして甜菜糖産業もヴォルガジャーマンの文化島も歴史地理学の研究対象となったわけである。

(日本大学)

## 〔付記〕

本稿の作成にあたり、科学研究費補助金基盤研究 (A) 「世界の博物館アメリカー移民と基層文化の再検討によるグローバル地誌の構築―」(研究代表者：矢ヶ崎典隆)の一部を使用した。

〔注〕

- 1) Myrick, H., *Sugar: A New and Profitable Industry in the United States for Capital, Agriculture and Labor*, Orange Judd Company, 1897. Arrington, L. J., *Beet Sugar in the United States: A History of the Utah-Idaho Sugar Company, 1891-1966*, University of Washington Press, 1966. Arrington, L. J., "Science, Government, and Enterprise in Economic Development: The Western Beet Sugar Industry" *Agricultural History*, 41, 1967, pp.1-17. May, W. J. Jr., *The Great Western Sugarlands: The History of the Great Western Sugar Company and the Economic Development of the Great Plains*, Garland Publishing, Inc., 1989. Sugar City Book Committee, *Attached to Sweetness: Chronicle of Sugar City Past to Present*, Sugar City Book Committee, 1982. Nash, G. D., "The Sugar Beet Industry and Economic Growth in the West" *Agricultural History*, 41, 1967, pp.27-30.
- 2) 矢ヶ崎典隆「アメリカ合衆国アーカンザス川流域の甜菜糖産業」*歴史地理学*42-4, 2000, 1-22頁。
- 3) Sherow, J. E., *Watering the Valley: Development along High Plains Arkansas River, 1870-1950*, University Press of Kansas, 1990.
- 4) 前掲2)。なお、20世紀後半からは、巨大な地下水資源であるオガララ帯水層からの揚水とセンターピポット灌漑装置の普及により大規模灌漑が進展して、「新しいコーンベルト」と総合的畜産業が形成された。矢ヶ崎典隆・斎藤功・菅野峰明編『アメリカ大平原—食糧基地の形成と持続性—増補版（日本地理学会海外地域研究叢書3）』古今書院、2006。
- 5) ブラジル北東部のサトウキビ糖産業については別稿で論じた。矢ヶ崎典隆・斎藤功「ブラジル北東部ゴイアナ川流域における製糖工場の展開とサトウキビ集荷圏の空間組織」*地理学評論*65A-1, 1992, 17-39頁。
- 6) Taylor, P. S., "Hand Laborers in the Western Sugar Beet Industry" *Agricultural History*, 41, 1967, pp.19-26. Taylor, P. S., *Mexican Labor in the United States: Valley of the South Platte, Colorado*, University of California Publications in Economics, Vol. 6, 1930. Schwartz, H., *Seasonal Farm Labor in the United States*, Columbia University Press, 1945. Iwata, M., *Planted in Good Soil: A History of the Issei in United States Agriculture*, Peter Lang Publishing Company, 1992.
- 7) Long, J. W., *From Privileged to Dispossessed: The Volga Germans, 1860-1917*, The University of Nebraska Press, 1988. Kock, F. C., *The Volga Germans: In Russia and the Americas, from 1763 to the Present*, The Pennsylvania State University Press, 1977.
- 8) ジョーダン は北アメリカにおけるヨーロッパ移民の一連の研究を踏まえて、前適応 (preadaptation) 概念の適用を主唱した。Jordan, T. G., "Preadaptation and European Colonization in Rural North America" *Annals of the Association of American Geographers*, 79, 1989, pp. 489-500.
- 9) 矢ヶ崎典隆「アメリカ合衆国ハイプレーンズを事例としたエスニック地誌の方法」*東京学芸大学紀要人文社会科学系* II, 62, 2011, 63-77頁。
- 10) American Historical Society of Germans from Russiaの本部はネブラスカ州リンカーンにあり、アメリカとカナダに47か所の支部を有する。この組織は *Journal of the American Historical Society of Germans from Russia* を定期刊行するほか、1970年から毎年、全国大会を開催する。
- 11) 前掲2)。
- 12) Kansas State of Board of Agriculture, *The Sugar Industry in Kansas, for the Year 1890. Report of the Kansas State Sugar Inspector*, Kansas Publishing House, Topeka, 1891.
- 13) 前掲2)。
- 14) 前掲3) 40頁。
- 15) *La Junta Tribune*, 1901年4月24日。
- 16) *Finney County Directory 1886-7*, Garden City, Reprinted in 1988 by Finney County Kansas Historical Society Inc.
- 17) Taylor, E. and Coburn, F. D., "Introduction" in

- Kansas Department of Agriculture, *Thirteenth Biennial Report of the Kansas State Board of Agriculture to the Legislature of the State, for the Years 1901 and 1902*, Kansas Department of Agriculture, 1903, p.v.
- 18) Block, H., “Sugar-beets, Story of their First Three Years of Experimental Production in Kansas for Commercial Sugar-making” in Kansas Department of Agriculture, *Fourteenth Biennial Report of the Kansas State Board of Agriculture to the Legislature of the State, for the Year 1903 and 1904*, Kansas Department of Agriculture, 1905, pp.651-662.
  - 19) Howell, N., “Kansas Sugar History Dates Back to 1800s” *Garden City Telegram*, 1971年6月3～11日。
  - 20) 前掲19)。
  - 21) Marvin, A. M., “The Fertile Domain: Irrigation as Adaptation in the Garden City, Kansas, Area, 1880-1910” Ph.D. Dissertation, University of Kansas, 1986, pp.50-70.
  - 22) Markoff, D. S., “A Bittersweet Saga: The Arkansas Valley Beet Sugar Industry, 1900-1979” *Colorado Magazine*, 56, 1979, pp.161-178.
  - 23) Blanchard, L., *Conquest of Southwest Kansas*, Finney County Historical Society, 1931, p.329. 復刻版1989年。
  - 24) Stoeckly, W. F., “A Brief History of “The Garden City Company” and “Sugar Factory” in Memory of Russell T. Tutt from 1946 to 1991” Unpublished Manuscript, n.d.
  - 25) 前掲21) 170頁。前掲 23) 6, 11頁。
  - 26) *Topeka Capital*, 1906年11月16日。
  - 27) *Topeka Journal*, 1906年11月16日。
  - 28) *Garden City Herald*, 1906年11月17日。
  - 29) 前掲19)。
  - 30) 前掲24) 8頁。
  - 31) Oringderff, B. A., “Short History of the United States Sugar and Land Company, Now Called The Garden City Company” Unpublished Manuscript, n.d.
  - 32) 前掲24) 10頁。今日、ガーデンシティカンパニーの所有地は28,000エーカーである。
- このうち、24,000エーカーが灌漑されており、グレートイースタン水路からの水と深井戸の水が灌漑に利用される。借地農民の平均は960エーカー（1.5セクション）である（ガーデンシティカンパニー、デイヴィッド・ブレン氏談、1998年9月2日）。
- 33) Bark, D. H., “Irrigation in Kansas” U.S. Department of Agriculture, Office of Experiment Stations, Bulletin 211, 1909.
  - 34) 前掲24) 16頁。マッキニー湖は現在では1,000エーカー以下に縮小された。グレートイースタン水路は現在でも利用されているが、Great Eastern Irrigation Associationが非営利団体として組織されており、その株式の80%をガーデンシティカンパニーが所有する。なお、ガーデンシティカンパニーの所有地ではセンターピボット灌漑は行われていない。これは、農地が平坦化されていること、労働力は必要ではあるがコストが低いこと、パイプや水路が張り巡らされているという理由による（ガーデンシティカンパニー、デイヴィッド・ブレン氏談、1998年9月2日）。
  - 35) この機関車は1955年ころまで使用された。フィニー郡歴史協会ファイルのメモによる。
  - 36) 前掲24), 前掲31), *Kansas City Times*, 1938年11月12日。ガーデンシティウエスタン鉄道は1982年にガーデンシティコープGarden City Coopに売却され、運営されるようになった。フィニー郡歴史協会ファイルのメモおよびガーデンシティカンパニー、デイヴィッド・ブレン氏談、1998年9月2日。
  - 37) 前掲24), 前掲31)。
  - 38) 前掲19), 前掲24)。
  - 39) Williams, H. P., *The Czar’s Germans with Particular Reference to the Volga Germans*, American Historical Society of Germans from Russia, 1975.
  - 40) Kloberdanz, T. J., “Plainsmen of Three Continents: Volga German Adaptation to Steppe, Prairie, and Pampa” in Luebke, F. C. ed., *Ethnicity on the Great Plains*, University of Nebraska Press, 1980, pp.54-72. Kloberdanz, T. J., “The Volga Germans in Old Russia and in

Western North America: Their Changing World View” *Anthropological Quarterly*, 48-4, 1975, pp.209-222.

- 41) *Topeka Daily Capital*, 1906年9月23日。
- 42) 矢ヶ崎典隆・斎藤功「アメリカ合衆国ハイプレーンズにおける灌漑化と農業地域の変化」新地理46-4, 1999, 14-31頁。斎藤功・矢ヶ崎典隆・二村太郎「カンザス州サンドヒルにおける土地所有と土地利用の変化—アーカンザス川右岸を事例として—」人文地理51-5, 1999, 28-47頁。
- 43) アルヴィン・コムロフスキー氏談, 1999年9月7日, フィニー郡歴史協会にて。
- 44) ラウル・ラップ氏談, 1999年8月20日, フィニー郡歴史協会にて。
- 45) 前掲43)。
- 46) 前掲2) 16頁。
- 47) United States Sugar and Land Company (A Corporation), フィニー郡歴史協会所蔵。保険会社はミネソタ州セントポールのセントポール火災海上保険会社 (Saint Paul Fire & Marine Insurance Company) で, カンザス州ウィチタの代理店 (Van Arsdale and Osborne 社) が担当した。
- 48) The United States Sugar and Land Company,

*Growing of Sugar Beets*, 1913, フィニー郡歴史協会所蔵。

- 49) 前掲24)。 *Garden City Telegram*, 1979年6月29日。
- 50) 前掲43), 前掲44)。
- 51) 前掲43), 前掲44)。
- 52) 前掲43), 前掲44)。
- 53) 前掲43)。
- 54) *Garden City Telegram*, 1941年6月18日。
- 55) 前掲43)。
- 56) 前掲44)。
- 57) 前掲43)。
- 58) *Topeka Capital*, 1941年2月2日。 *Garden City Telegram*, 1979年6月29日。
- 59) 前掲43)。
- 60) *Kansas City Times*, 1942年11月5日。
- 61) 前掲24)。
- 62) *Garden City Telegram*, 1941年6月18日。
- 63) Hill, R. W., *The Holly Sugar Corporation, The First 90 Years*, The Newcomen Society of the United States, 1994.
- 64) Markoff, D. S., *How Sweet it was! The Beet Sugar Industry in Microcosm: The National Sugar Manufacturing Company, 1899 to 1967*, Garland Publishing, Inc., 1986.

## Volga Germans and the Beet Sugar Industry in Southwestern Kansas, USA

YAGASAKI Noritaka

The cultivation of sugar beets and the manufacture of beet sugar played an important role in developing the American West from the late nineteenth century through the mid-twentieth century. Capital, technology, labor, and sugar beets were all introduced to the semi-arid region of the Arkansas valley, which was one of the centers of beet sugar production. This study scrutinized the development of the beet sugar industry in and around Garden City, Finney County, in southwestern Kansas. Following a few years of successful experimental cultivation of sugar beets, the United States Sugar and Land Company was organized, and the company constructed a sugar factory in 1906 to launch the first campaign in the month of November of the same year. The company owned vast farmland to supply sugar beets for processing at the Garden City plant, while also operating a railroad line that facilitated the transport of sugar beets, as well as irrigation canals and a power plant. Intensive cultivation of sugar beets attracted Germans from Russia, who began to migrate from the Volga regions to the Americas in the late nineteenth century. Volga Germans settled as tenant farmers in the sugar company's fields and houses for growing sugar beets. The population characteristics of Volga Germans and the nature of their ethnic community were examined in detail using federal population census schedules of 1900, 1910, and 1920, with particular focus on Sherlock Township in Finney County, where the Volga German population was concentrated. Volga Germans were successful tenant farmers who maintained their ethnic community in rural areas, thereby forming a cultural island. However, Garden City's sugar factory was closed in 1955, reflecting the decline of the sugar industry in the Arkansas valley. Consequently, the community of Volga Germans ceased to exist, as many members of the ethnic group left the area to find new employment opportunities. Thereafter, the existence of the beet sugar industry in southwestern Kansas and the community of Volga Germans were forgotten within the pages of history.

**Key words:** Sugar industry, sugar beet, Great Plains, Volga Germans, immigration